

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 32

Website: 「発達理論の学び舎」

---



---

## 目次

- 621. 去來した想い
- 622. 隅田川での邂逅と肯定
- 623. オーロラと統一体
- 624. 呼吸のように
- 625. 伝承
- 626. 新年を迎えて
- 627. 小泉八雲旧居で見た小宇宙
- 628. 名園と名画の共演:足立美術館へ訪れて
- 629. 変わらぬ新年
- 630. 雲竜のごとく
- 631. ニッサン・イングル先生との共同絵画作品『平穏な悟り世界における死と再生』
- 632.瀬戸内海の海岸線より
- 633.名付けと器の拡張
- 634.シンクロナイゼーションという現象について
- 635.幽遠世界の富士山
- 636.ノルウェーの森
- 637.休息からの飛躍
- 638.ロシア上空での出会い
- 639.フローニゲンからの再出発
- 640. 欧州生活第二章の開始

---

## 621. 去來した想い

宿泊先のホテルに到着すると、ヘルシンキから成田まで一睡もしなかったせいか、さすがに疲労が溜まっていることに気づいた。実質的に東京で活動できるのは明日のみであるため、明日に備えて午後八時半に就寝した。

早朝四時に起床し、疲労感も取れていたのだが、もうひとサイクルほどレム睡眠とノンレム睡眠を回したいと思って再びベッドに戻ったところ、結局、そこから五時間寝てしまい、目覚めると九時を過ぎていた。そのおかげで、楽しみにしていたホテルの朝食を逃してしまうことになった。しかしながら、自分の胃腸の動きに意識を向けると、朝食を欲していないことがわかつたので、朝食を抜いたことにより、胃腸を休めることができたのは幸運であった。

その後、三十分で支度をし、日本橋のTOHOシネマズに足を運んだ。日本で大ブームになった映画『君の名は。』を見るためである。知人がこの映画を絶賛しており、何やら形而上学的な世界観が表現されていると聞いていた。鑑賞をしてみると、知人の言っていた通りだとわかつた。

実は、オランダ到着からの五ヶ月間、そして特にこの数週間、精神が違う世界に飛び込むことが多かったのだが、この映画はさらにそうした現象に拍車をかける作用を持っていた。ただし、この作品の持つ意味と私に与えた影響について言葉を紡ぎ出すことは今の自分にはできない。

映画を鑑賞した後、墨田区にある『すみだ北斎美術館』に足を運んだ。葛飾北斎の生き方と求道者としての精神は、私に大きな感銘を与えてくれる。そのため、この美術館には是非足を運ぶ必要があると思っていた。日本橋から北斎美術館まで歩いていると、自分がこの国で生きることをまだ許されていないことを知った。そして、自分がこの国でいつか再び生活することを心から望んでいることが改めてわかつたのだ。

この感情は悲壮感に近いかもしれない。数週間前、外出のために自宅の螺旋階段を降りている時に、「何としても客死だけはしたくない」という切実な想いがこみ上げてきたのだ。その想いと日本橋から北斎美術館までの道のりの中で去來した想いは近いものがある。自分の仕事が真に自分の仕事として形を持ち始める60歳以降、自分はどのタイミングでこの国に戻ってきたらいいのかということに対して、ひどく当惑していた。今の私は、間違いなく究極的な一点に向けて絶えず歩みを進

---

めているのだが、時折、その一点へ向けての歩み方に迷いを感じことがあるのも確かだ。だが、迷いながらでも歩き続けたいと思う。こうした生き方を根底から肯定してくれるのが、北斎をはじめとした偉大な表現者たちだと信じている。2016/12/26

## 【追記】

この日記は一年半前の年末に日本に一時帰国した時のものである。ここで記述されているような感情を抱く自分はもういない。その点にまた新たな自分を見出すことができる。これはメソな発達であるのかマクロな発達であると言えるのか、その判断に悩むところもあるが、上記の感情が生まれてくる根源をすでに対象化し、そこから脱却している自分がいるところを見ると、これはマクロな発達だと言えるだろう。人は本当に一年半の間絶えず内省的に生き続ければ、確かな一步を歩み出せることを示しているように思える。フローニングン:2018/4/3(火)16:48

### 622. 隅田川での邂逅と肯定

今日は日本橋や両国あたりの東京の下町を歩きながら、まるで自分が海外を旅するのと同じように、道行く人たちや目に見える建物を観察していた。終始、自分の目を上下左右に動かしながら、東京の街を歩いていたのである。自分の目に映る全てのものが新鮮であり、強烈な好奇心を私にもたらす。青々とした新鮮さに包まれた真冬の東京の街の中で、私は黄色がかった感情に包まれていた。

街を行き交う人々の動きが止まって見え、逆に、街に存在している静止した物体が動いているよう見えた。静と動の逆転現象を知覚した時、静と動は一つの事物が常に内包している両側面だと改めて知る。それに気づいた時、自分の内側で動いていたものが止まり、止まっていたものが動き出すような感覚が湧き上がった。こうした感覚を抱えながら、墨田区にある『すみだ北斎美術館』に向かっていた。

目的地である北斎美術館に到着すると、この日はなんと休館日であった。事前に確認した際には、休館という情報がなかったので、一瞬残念に思った。美術館前の通りに掲げられた案内板に目を通すと、80歳を過ぎてからも創作意欲が衰えることはなく、常に新しい画法を取り入れながら、浮世絵の道をさらに極めようとする北斎の姿勢を伺うことができ、打たれるものがあった。

---

日本に一時帰国する数日前、オランダ人の知人とディナーを共にした。その方は先週末に75歳となり、100歳まで生きると述べていた。私も物心ついた時から、少なくとも100歳まで生きると固く誓っていた。

しかしながら、最近になって、自分の資質と志を考慮に入れると、111歳までは少なくとも仕事をし続けなければならないと思うようになった。このような計算をするのは馬鹿げているだろうし、111歳まで仕事をするために、今の食事や睡眠時間、そして運動を含め、毎日の過ごし方を意識しているのは馬鹿げているだろう。でも私は、北斎と全く同様の考え方を持っているのだ。死ぬ直前の最後の最後まで、探究をやめたくはないのである。

北斎美術館に向かう最中、隅田川をかける橋に辿り着いた。橋を一步一歩進み、橋の真ん中に差し掛かった時、私は思わず足を止めた。足を止めた瞬間に、自分の生き方は間違いなく馬鹿げていると思った。なぜ自分はこのような生き方をしているのか、全く合点がいかず、橋の上から隅田川をぼんやりと眺めながら考えていた。

馬鹿げていると思う自分を超えた先にいる自分がいるのを知っているし、この生き方を馬鹿げていると思う自分が何によって作り出されているのかも理解していた。隅田川の橋の上で私が意見を求めていたのは、この馬鹿げた生き方を肯定してくれる、今の自分のその先にいる自分であった。

いつもこの自分は私に対して厳しいが、こうした馬鹿げた生き方を受け入れ、それを背後から激励してくれる大切な存在である。そして直感的に、この馬鹿げた生き方を肯定してくれる自分というのは、111歳で死ぬ直前の自分なのではないかと思ったのだ。臨終を迎える自分が、それまでの自分の人生を完全に肯定することができるというのはなんと幸運なことだろうか。そうであるならば、私は今のこの馬鹿げた生き方を徹底的なまでに貫いていかなければならないと思った。

誰も見ていないところで、ひたすらに精進を続け、一つ一つ自分の仕事を積み重ねていくこと以外に、今の自分を納得させることは何もない。この生き方を貫いて毎日を生きていれば、仮にどこかで自分の生が尽きることがあったとしても後悔は全くないだろう。111歳の自分を信じ、彼に全てを委ねてみようと思った。これが自分を真の意味で信じた生き方なのかもしれない。2016/12/26

---

---

## 【追記】

この日記で書かれている体験は今も鮮明に覚えている。最後の自分が現在の自分と出会い、そこで言葉をかけるというものだ。今もこの瞬間に、自分の背中の後ろにその最後の自分が見守ってくれているのを感じる。守護霊というのは自らの存在に他ならないのではないか。それは自己を超えたところにいる自分であるのではないかという考えが脳裏をよぎる。

この翌年、私はまた『すみだ北斎美術館』を訪れた。その時は無事に開館しており、母方の叔父と共にここを訪れた。しかし、日本への帰国が心身に強く影響を与え、滅多にないのだが体調を崩してしまい、満足のいく形で北斎美術館を見ることができなかつた。これはもしかすると、私がまだ北斎から学ぶには早すぎるということを暗示しているのかもしれないし、もう一度出直す必要性を暗示しているのかもしれない。2018/4/3(火)16:58

### 623. オーロラと統一体

今年のクリスマスイブは成田行きの機内の中で過ごした。今回はアムステルダムからヘルシンキを経由して成田に向かう便であった。北欧路線の搭乗中に、運が良ければオーロラが見えると前々から聞いていたため、あえてパリ経由やフランクフルト経由ではなく、今回の路線を選んだ。それぐらい今回の搭乗でオーロラが見えることを楽しみにしていた。

オーロラを見る能够であれば、てっきり北欧の上空で見られるものだと思っていたが、実際はロシアの上空の方がよく見えるらしい。結局、今回は天候の都合上、機内からオーロラを見ることができなかつた。オーロラについて親切に説明をしてくれたCAの方曰く、何やらオーロラの発生状況がわかるアプリがあるそうだ。そのアプリを用いたところ、帰りの便が一番オーロラが見える確率が高いとのことであった。

未だかつてオーロラをこの目で見たことがないので、帰りの便の楽しみがまた一つ増えたことは嬉しい。それにしてもオーロラは実に神秘的な現象である。その発生メカニズムがわからなかつたので改めて調べてみると、電子とイオンで構成された「太陽風」と呼ばれるガスが太陽から放出され、それが地球に到達し、大気中の原子と衝突することによって、原子が興奮状態になり、美しく発光し、それがオーロラだということである。

---

何かが私たちに衝突し、その衝突によって私たちの中で揺らぎと共に、ある種の興奮状態が生まれ、それが私たち自身を光らせることと同じように思えた。自然の中にある神秘的な現象から、人間の中にある神秘的な現象について学ばされることがいかに多いことだろうか。

オーロラについてぼんやりと考えていると、日本に一時帰国してから早いもので五日経っていることに気づいた。昨日まで家族で島根県に訪れていたのだが、この五日間は地理的に様々な場所に自分がいたように思う。フローニンゲン、アムステルダム、ヘルシンキ、銀座、日本橋、山口県、島根県というように、それらの地域から一つの法則性を見出すのが難しいぐらいに多様な場所で呼吸をしていた自分がいる。

それらの地域が醸し出す雰囲気や景観は、当然ながら異なる。しかしながら、それらの地域はどれも同じ惑星に所属するものであり、観想的な意識を私に喚起するという点においては全く変わりない。もはやどの国やどの地域に行っても、揺るがずにそこにいる自己の存在を疑うことなく感じることができるのだ。それらの地域は私に対して、揺るがぬ自己の存在を教示してくれるものであり、同時に、私という自己がそれらの地域であることを教示してくれるものであった。

多様な国や地域に身を置くことに対して、以前のような精神的な錯乱はもはやない。自己という一つの大きな波の中に、それらの国や地域が包摂され、自己と場所が一つの統一体をなしているのがわかる。この統一体が存在するがゆえに、もはや私はこの惑星の中で、常に観想的な意識を持つて日々の生活を形作ることができる気がするのである。2016/12/30

### 【追記】

自力だけではなく他力が私たちを育んでいくという側面を忘れてはならないことをこの日記は伝えているように思う。とりわけ、場所が私たちに与えてくれる恩恵を見逃してはならず、そこに価値と尊さを見出す必要があることを再確認させてくれる。自己が究極的な一点に向かっていけば行くほど、この世界のどこにいようとも本質的な自己を通じて生きることが可能になってくる。

一方で、そうした自己へ至るために、多様な場所との接触と交流が必要なように思えてくる。小さい頃に両親が頻繁に旅に連れて行ってくれたこと、これまで様々な県や国で生活してきたということが、見えないところで自分という存在を深めてくれていたことに改めて感謝をしなければならな

---

い。今生活しているフローニゲンという場所も私に多大な影響を与え、来週訪れるワルシャワもブダペストもまた私の成熟を後押ししてくれる存在だろう。あの時も、この瞬間も、これからも、この世界の様々な「場」は自己と変わらないほどに尊い存在だ。2018/4/3(火)17:12

## 624. 呼吸のように

今年も年末にかけて、集中的に文章を執筆し、第二弾の書籍の原稿を書き上げることができた。文章を書いている最中と書き上げた後に、日記に言葉を綴る余力がなかったことは以前に言及していたように思う。

日本に一時帰国してからも、東京の街を観光していたり、島根に旅行に行ったりしていたため、日記を書かない日が数日あった。これが功を奏してか、再び日記に文章を綴る力が湧いてきたようである。振り返ってみると、九月から本格的にスタートしたフローニンゲンでの生活以降、一日たりとも休息を入れる日がなく、ひたすらに探究活動に打ち込んでいる自分がいた。文章を読むことと書くことが、休憩と同一のものだという境地にいつの間にやら迫り着いていたのだ。

時折、仕事や探究活動を「遊び」という言葉で表現する人を見かけるが、こうした言葉を発することができるのには、眞にその道を極めていった人だけだろう。仕事や探究活動を「遊び」という言葉で括る人たちの表現活動や創作物を見ると、十中八九、偽物であり、そこには滲み出す深みが一切ない。それはそもそも、「遊び」という言葉を語る当人の中で、遊びという言葉が彫琢されていないからだろう。つまり、「遊び」という言葉の意味が浅薄であるために、その人の表現活動や創作物そのものも必然的に浅薄になってしまうのである。

今の私は、自分の偽物性を嫌という程自覚しているがために、間違っても自分の仕事や探究活動を「遊び」という言葉で括ることなどできない。そのようなことができるのには、少なくとも数十年先のことだろう。同様に、「自分の仕事や探究活動が好きだから続けている」と述べることも、非常に浅薄な表現であるように思える。確かに、私が仕事や探究活動を行う根底にある感情と「好き」という感情が持つベクトルの向きや味は似ているが、二つの感情は異質なものである。

---

私は間違っても、自分の仕事や探究活動を「好き」という一つの感情で表したくないし、それらを通じて遊んでいるとも表現したくない。そうした言葉で自分の活動を表現してしまう時、それは間違いなく自分の内側で自己欺瞞が発生してしまうのである。

自分の仕事や探究活動を、仮に何か別の活動と類比させるのであれば、呼吸をすることに近いかもしれない。遊んでいるというよりも、呼吸をするのと同じように、日々の自分の仕事や探究活動を行っているような気がするのだ。また、「呼吸をすることが好きだ」と述べることがおかしな話であると同様に、「自分の仕事や探究活動を行うことが好きだ」と述べることにも違和感があることからも、自分の日々の活動を呼吸と喻えることは、現時点ではとても納得がいく。

要は、日々の仕事や探究活動が、自己の存在と密接不可分なものになってきているということである。そこから「呼吸を通じて遊ぶ」という遊の境地に至るには、並々ならぬ修練が要求されることになるだろう。2016/12/31

### 【追記】

この日記で言及している事柄に同意するのは、日々の全ての実践を呼吸のように行うことの大切さである。実際に、今の私は全ての取り組みを呼吸をするかのように行うことができている。その点には少なからず前進を感じる。ただし、ここから遊の境地に至るにはあまりにも道のりが長い。

一つ驚いたのは、この日記で述べているように、当時数日間ほど日記を執筆していなかった日があつたことである。それらの日には残念ながら、私は自分の人生を生きていなかったのだろう。なぜならその日に生じる思考や内的感覚を言葉として記録していなかったのだから。実際に、日記を書かなかつた日々の自分の生の実感を今確認することができない。私は数日間私を殺したのだと思う。

2018/4/3(火)17:23

### 625. 伝承

日本に一時帰国することによって、新たな日本語を獲得しつつあることを実感している。当然のことながら、それは新たな日本語の語彙を獲得することではない。自分の中で自分自身の新たな言葉

---

を見つけるということである。日本に一時帰国する一週間前に、自分の言葉に新鮮さがないことに気づいていた。

それは多分に、第二弾の書籍を執筆することの中で、自分の多くの言葉を紡ぎ出していたことと無縁ではないだろう。しかしながら、それ以上に何か重要なことが、言葉と自己との間に横たわっている気がしている。

今このように実家に戻ってくることによって、自然と言葉が湧き上がってくるのは非常に不思議である。一人の人間の中で、絶えず変化が起こり、それは進化への歩みを形成するものであるがゆえに、新たな言葉が内面世界から湧き上がってくるという現象には納得がいく。

ピアノを演奏する母が何気なく、「偉大な作曲家だけではなく、無名な作曲家を含め、彼らを取り巻く周りの人たちからの支援を受けながら、有名無名の作曲家がたくさんの優れた楽譜を残してくれたことに有難さを感じる」という趣旨のことを述べていた。人間の仕事の尊さは、まさにそこに凝縮されているように思う。文化や環境を含めた他者からの支援のもと、自分の仕事を何らかの形として伝承していくことの中に、人間の営みが持つ尊さを感じるのだ。

自己の表現物を形として残し続ける人に対して私が尊敬の念を覚えるのは、彼らが自分の存在をかけてこうした伝承役を積極果敢に担っているからであろう。日々の生活の中で、私が絶えず音楽を聴き、絵画作品を眺めているのは、作者が担った伝承行為に対して敬意を表するためという理由と、大いなる励ましをもらうためという理由があるのかもしれない。いずれにせよ、形を浮き彫りにし、形を残すことに絶えず従事していきたいと思わされたことは間違いない。なぜ形を残すことが重要なのか？という問い合わせについて長らく考えていた。

この問い合わせに対しても明確な一つの答えがあるわけではないが、答えの重要な候補の一つに、「人のつながり」があるような気がしている。作品を形として生み出すとき、そこには作者の何らかの想いが存在している。その想いの根幹には、人のつながりがあるようだ。こうした想いは人間に普遍的なものであろう。そのような普遍的な想いが深ければ深いほど、それが形になった時、一つの作品として長くこの世界に存在し続けることになるのだと思う。2016/12/31

---

---

## 626. 新年を迎えて

気がつくと新年を迎えていた。初日の出は、横山大観の作品に出てくる太陽の光のように力強く美しい。四年ぶりに実家で年末年始を送ることができ、このような初日の出を拝めることを嬉しく思う。

昨年の年末年始は、東京の自宅で過ごしており、書籍の原稿の手直しを行ったり、普段と変わらず専門書や論文を読んでいたように思う。今年の大晦日は、実家でリラックスをしながら、先日の家族旅行で訪れた島根県の足立美術館で購入した画集を眺めたりしていた。

普段から脱力をした状態で仕事を進める事を意識しているが、今はいつも以上に力みがなく、心身が非常に緩んだ状態にあるのがわかる。硬くなるのではなく、緩むことによって、心身に柔軟な変動性がもたらされ、それが自然と私を前に進めていく。緩むことは、何をするにも非常に重要であり、こうした柔らかさは鍛錬を継続させるためだけではなく、実践をより深みへと至らしめる重要な要素だと思う。仮に外面が硬く見えたとしても、内面は常に柔らかさを保つことが重要だ。元旦の焼き餅のように。

日本に一時帰国している都合上、東京に到着して以降、自分の思考空間が日本語で満たされているのを感じる。英語とオランダ語混じりの思考空間から意識的に日本語の思考空間へ移行したわけではなく、これは自然な調節であった。私の精神世界の中で、このように言語を自然に調節することは、もはや何らの違和感なく遂行されるものとなっている。日本語の思考空間の中で思う存分くつろぎ、実家にいる間に日本語の文章を存分に味わっておきたいのだ。

脱力した状態で、自分の日本語を練磨し、成熟への歩みをまた少し進めたい。新年の誓いのようなものはこれといって特にないのだが、今年も昨年と変わらず、自分が扱う諸々の言語体系をより磨いていくことが重要であり、深まりを望むものをより深めていくことが大切である。

今年はなんだか昨年よりも大きな変化を経験するような気がしている。しかしながら、それが具体的にどのような形を伴ったものなのかは定かではない。ただし、それらの変化は私が心から望むものであることは確かだ。確信めいたものがあるとすれば、2017年は、全く違う世界へ足を踏み入れることを支えてくれる年になるであろう、ということだ。2017/1/1

---

---

## 【追記】

この日記の最後に書いていることが本当に実現された。言葉は人生を形作っていく。自らの言葉を外側に表現し、それを形として残せば。内面世界と外面世界が相互依存関係にあるのだから、言葉が自らの人生を形作っていくというのは、1+1が2であるよりも当たり前であり、それは一つの真理だろう。1+1が2であることがどれだけ疑わしいことか、一方で、言葉が自らの人生を切り開き、新たに形作っていことにどれほど疑いがないことか。2018/4/3(火)17:32

### 627. 小泉八雲旧居で見た小宇宙

年末に久しぶりの家族旅行を行った。年末年始を実家で過ごすのは実に四年振りであり、今回のように家族全員で旅行に出かける機会に恵まれて有り難く思う。今回の旅先は、島根県と鳥取県である。厳密には、宿泊先は鳥取県の大山を見張らせる場所にあり、主に観光をしたのは島根県の名所である。二泊三日の旅行の初日にまず訪れたのは、島根県の松江城である。

実は、以前に勤めていた会社の社員旅行で今から七年前に松江城に訪れたことがあるのだが、当時は幹事をしていたこともあり、ゆっくりと城を見学することはできず、ほとんど記憶に残っていないかった。幸運にも今回は、じっくりと城の中にある資料を見る事ができた。日本に残る城を見学する際に湧き上がる感情は、欧州に残る城を見学する際に湧き上がる感情とまた異なる。

ただし、今の私は、それら二つの感情の差について語る言葉を持ち合わせていない。この点については、また一つオランダに持ち越す課題となった。

松江城の次に訪れたのは、松江藩七代藩主の松平不昧公(ふまいこう)が建築した「明々庵(めいめいあん)」と言う茶室である。非常に風情のある茶室であり、そこで和菓子と共に一杯のお茶をいただいた。和的なものに触ることは、自分の心身を芯からほぐしてくれる。一息つくというのはこういうことを意味するのだろう。茶道に関して疎い私も、その世界の奥行きの深さだけは少しずつ分かるようになってきた。

---

世の中には、実に深くまで開拓された領域があるものだと感嘆の声を漏らさずにはいられなかつた。新たな道を切り開き、その道を極めていくために、いかに多くの時間と鍛錬を必要とするかに思いを馳せた時、背筋が正されるような思いになった。

明々庵の後に訪れたのは、小泉八雲旧居である。小泉八雲が実際に住んでいた家の庭を見た時、そこに小宇宙が広がっていることを確かに見た。横に座って写真を撮影していた父が、「小宇宙だ」という一言を呟いた。その庭を見た瞬間に、私もそこに小宇宙が広がっていることを確かに感じ取っていたため、父のその一言は不思議な共振現象であるように思った。日本の庭園が小宇宙を形成しているということを耳にしたことはあったが、実際にこの目でそれが小宇宙であると実感したことはこれまでない。

この庭の規模は大きくなく、むしろとても小さなもののだが、そこに広がる小宇宙を見た時、打たれるものがあったのだ。とても小さな庭に飲み込まれそうになったのは、産まれて初めてのことだろう。明々庵にせよこの庭にせよ、物理的な大きさを超越した遙かに巨大かつ深遠な世界が、目には見えないところで確かに広がっているということを感じ取れるようになってきているのは、自分の内側の成熟の証なのかもしれない。それを確認させてくれたのが、これらの場所であり、私のさらなる進歩を促すように仕向けてくれたのが、これらの場所だったのだ。2016/12/27の出来事

### 【追記】

小泉八雲旧居の庭に見出した小宇宙が自分の内側に今も生き続けているのを感じる。何かの偶然か、来週末の東欧旅行を持って行こうと思ったのは、ハンガリーの作曲家バルトークが残した『ミクロコスモス』という作品群である。

一つ前の日記の追記で書き留めたように、この世界は内面宇宙と外面宇宙で構成されており、内面宇宙の深さは外面宇宙に何らかの形として表現が可能であり、外面宇宙の中に存在する形を持つものには内面宇宙の深さが宿る。そのようなことを改めて考えさせられる。ブダペストで訪れるバルトーク記念館を含め、東欧で私はどのようなミクロコスモスを見出すだろうか？自分のミクロコスモスの新たな側面何か見出すことができるだろうか？2018/4/3(火)17:43

---

## 628. 名園と名画の共演：足立美術館へ訪れて

島根・鳥取旅行の二日目は、足立美術館を訪れた。この美術館も、七年前の社員旅行の際に足を運んだことがあるのだが、当時は時間の都合上、ゆっくりと展示されている作品を閲覧することができなかつた。七年振りにこの美術館を訪れてみて、大きな感銘を受けた。足立美術館が持つ庭園はどれも格別であり、そのあまりの美しさに足を止め、そこでしばらく立ち尽くしていた。

特に、「枯山水庭」は、ひときわ美しさを放っている。いや、途轍もない美しさを内に秘め、鑑賞者の内面的な成熟に呼応する形で美を表出してくれる、と表現した方が正確かもしれない。

庭そのものが一つの作品として形作られているのは間違いないが、何よりも打たれるのは、庭と美術館を取り巻く景観が一つの調和を成しながら極限の美を生み出していることである。足立美術館から見える雄大な山々と庭園が醸し出す美が、一つ次元の異なる領域で出会う時、このような美が顕現するのだと思わされた。今回の訪問は、年末の冬の時期であったが、他の季節に見せる表情を是非ともまた拝みたいと思った。

感銘を受けた二つ目は、横山大観の作品群である。繊細さと迫力を兼ね備えた数々の名作は、紛れもなく自分に衝撃を与えていた。足立美術館には、横山大観の作品が初期のものから晩年に至るまで、およそ120点が所蔵されているそうだ。大観の内面の深まりとともに少しずつ変化していく作品の様子を伺うことができ、これもまた私にとっての励ましの一つであった。大観の作品の現物をこの目で間近に見ることができたのはとても幸運であったと同時に、今日見た作品を今後も繰り返し眺めたいという強い思いが湧き上がってきた。

そのため、大観の画集を購入し、オランダに持つて帰ることにした。大観の作品を真に咀嚼するまでに相当の時間を要するであろうが、彼の作品が私の内面の成熟を支えてくれることは間違いない、という確信を持っている。

上記の庭園にせよ横山大観の作品にせよ、それらは美術館の本館にある。本館をゆっくりと見て回つていると、すでに昼食の時間になった。昼食を館内のレストランで済ませ、午後からは陶芸館をじっくりと見て回った。ここには、北大路魯山人(1883-1959)と河井寛次郎(1890-1966)という日本を代

---

表する二人の陶芸家の作品が展示されている。私は陶芸作品については疎いので、展示される作品をただ眺めているだけであった。

しかし、彼らが芸術活動を通じて残してきた数々の言葉もそこに展示されており、それらには多大な感銘を受けた。それらは、今の自分が持っている思想と態度を貫いていくことは間違いないことを確信させてくれるような言葉であった。

北大路魯山人と河井寛次郎という二人の偉大な表現者が残した数々の言葉を見たとき、それらの言葉に内包されている深みを目の当たりにしたように思った。同時に、表現者の思想の深さが作品の深さに色濃く表れるということも改めて痛感させられた。表現者の内面的成熟とその人が残す創造物の深さとの間には、拭い去ることのできない一本の線が通っているのだ。

そして最後に足を運んだのは、現代日本画の名作が展示されている新館である。ここに展示されている作品も非常に素晴らしいかった。どの作品も巨大なキャンバスに描かれており、それらの作品が訴えかけるものには凄まじいものがあった。ここに展示されている多くの作品が私の足を止め、それらの作品と対話をしたいと思わせてくれた。

全館を通じて、両親と一緒に意見交換をしながらゆっくりと鑑賞を楽しんでいたため、新館に到着する頃には帰りの時間が迫っていた。最後は少し駆け足で新館を見ることになってしまったため、ここに展示されていた作品が載っている画集を購入し、それもオランダに持ち帰ることにした。それぐらい素晴らしい日本画がこの新館に展示されていたのだ。

結局、この日の観光は足立美術館だけとなつたが、それぐらい時間をかけて堪能する価値のある美術館だと思う。今年の夏に訪れたパリのルーブル美術館よりも、足立美術館の方が私の心を捉えて離さない作品が多数所蔵されていたのは疑いようのない事実である。

この美術館の創設者である足立全康氏に対して大きな感謝の念を持つ。私にとって足立美術館は、名園と名画が織りなす調和の中で私をくつろがせてくれる美術館であり、日本の粋を感じたい時には必ず戻って来るべき美術館となった。2016/12/29

---

## 629. 変わらぬ新年

新年を迎えて一夜が明けた。一月の二日から、オランダにいた頃とほとんど変わらない生活リズムに戻った。学術論文や専門書を読んでいないと落ち着かないというわけでもなく、文章を書いていないと落ち着かないというわけでもないのだが、それらがない日常は今の私にとって考えがたいものである。

本居宣長は集中的な読書の後にしばらく書物から離れた、というエピソードを知人から聞いたことがある。私が書物から離れる日は果たしてやってくるのだろうか。

今日は午前中に、年末の島根・鳥取旅行を振り返っていた。旅行の最中、様々な考え方や感情が生起していたと思うのだが、それらは長期記憶としてどこかに蓄えられているわけではなく、短期記憶としてどんどんと忘却の彼方に葬り去られていることに気づく。旅行中の体験の中で印象に残っている出来事の上澄みだけでも今書き留めておこうとするのは、なんとかそうした記憶を自分の内側に繋ぎ留めておこうとする現われなのかもしれない。

文章の形を取るものはどれも、短期的な時間軸で再度読み直したい体験というよりも、長期的な時間軸でいつか読み返したいと思うようなものなのだと思う。自らの足取りをいつか確認するその日を迎えるまで、とにかく文章として体験に形を与えておくが何より重要だ。旅行中の体験を簡単に書き留めた後、“Dynamics in action: Intentional behavior as a complex system (2000)”という論文を読んでいた。

著者のアレシア・ジャレロが執筆した、ダイナミックシステム理論に対する哲学的考察がなされた専門書を数ヶ月前に読んでいたため、比較的速やかにこの論文を読み解くことができるだろうと思っていた。しかし実際には、ダイナミックシステム理論に関する言語体系がまだまだ私の内側で強固に構築されていないためだろうか、この論文で記述されていることが手に取るように分かるというレベルで読み進めることは到底できなかった。

この論文と並行する形で、複雑系研究のメッカであるサンタフェ研究所が提供しているオンラインコースを受講していた。論文とオンラインコースを行き来することによって集中力が持続し、学習が非常

---

にはかどった。やはり学習内容を比較的短い時間間隔の中で切り替えていくことは、学習効率が上がるようだ。

この数年間少しづつ、ダイナミックシステム理論の数学的手法について学習を継続させていたため、「非線形ダイナミクス：数理的手法」というコースの内容が以前に比べてはるかに理解しやすくなっていることに気づいた。

先ほどのジャレロの論文は、ダイナミックシステム理論に関する哲学的な内容であったため、その領域における言語体系の未熟さを実感したが、ダイナミックシステム理論の数学的手法については、少しづつ言語体系が構築されつつあるのを実感している。

当然ながら、こうした実感は刹那的なものであり、さらに専門的な内容を深掘りしていくば、そこで再び自分の言語体系の脆弱さを実感するだろう。このように、進歩と未熟さを絶えず実感しながら進むことが何よりも大切なだと思う。オランダに戻る日が近づいてきているが、今の私にできることは自らの言語体系を少しづつ堅牢なものにしていくことだけなのかもしれない。2017/1/2

### 630. 雲竜のごとく

島根県にある足立美術館で見た横山大観の作品に対する印象が、自分の深層部分で依然として振動を続けているのがわかる。足立美術館で購入した大観の画集を昨夜も就寝前に眺めていた。

大観の作品はどれも少なからず私を打つものがあるのは確かであるが、大観が89歳の時に創作した最後の作品『山川悠遠』は圧倒的な力を放っている。この作品を眺めた時、大観が到達した画境がいかに高潔で深遠なものかを思い知らされることになるだろう。

美術館で実物を見た時にも思わず立ち止まらざるを得なかつたし、画集においてもそれを食い入るように眺めざるを得なかつたのは、大観が創作したものの中でもこの作品が圧巻だからだろう。表現者の内面が真に深まる時、外面世界での表現物がここまで強力な靈力を放ちうるというのを改めて学ばせていただいた。

---

これは私にとって大きな励みであるとともに、少々お袈裟な表現で言えば、この世界で自分が生きていくことの頼みの綱をさらに太いものにしてもらったような感覚である。大観の作品を理解するには、私の内面の成熟度は非常に未熟である。大観の作品に支えられながら、励ましを受けながら、そして時に未熟ぶりを痛感させられながら、私も自分の仕事を残していきたいと思う。

美術館で実物を眺め、作品説明を読んでいた時に、横山大観が日本の思想家である岡倉天心を師としていたことを初めて知った。天心がボストン美術館から招聘を受けた際に、大観を連れて渡米していたという史実を知ったのだ。今から数年前に訪れたボストン美術館は、私にとって忘れる事のできない場所であり、そこで心を打たれた東洋美術作品の源流に、天心の貢献があるのではないかと思った。天心について調べてみると、彼はボストン美術館の中国・日本美術の代表を務めていたそうなのだ。

今回の足立美術館の訪問をきっかけに、大観・天心・ボストン美術館と私という存在が一本の線で結ばれたような気がした。この線は、日本人としての私にとって、生命線のように重要なものである。一人の探究者かつ表現者として、二人の巨匠との間に共通線を見出せたことは何よりも大きな意味を持つ。

渡欧前後の数ヶ月間において、私は精神的な錯乱状態に置かれることがあったが、どんよりとしたそれらの分厚い雲を今突き抜けることができたように思う。雲竜のごとく、自分の内側の何かが昇天を続けているのがわかる。内面世界の深みに沈みこんでいくとき、もはやその静けさに困惑することは断じてない。こうした清澄さの中に溶け込みながら、決して揺らぐことのない一点が絶えずそこに存在していることを知っている。絶えず昇天を続ける雲竜の背中にこの一点を乗せ、大観や天心が到達した境地にいつか辿り着けるように、毎日を形作っていかなければならない。2017/1/4

## 【追記】

横山大観の作品が収められた画集を久しぶりに眺めてみようと思う。大観が残した作品はこれからも私に大きな励ましをもたらし続けるだろう。この日記で「ボストン美術館」について触れているが、そこを訪れたのは今から五年前のことだったと思う。再びボストン美術館を訪れる日がやってくることを望む自分がいる。あの仏像はまだあの場所に変わらぬままに存在しているだろうか。変わらずに

---

あり続けているであろうあの仏像を再び見ることによって、私自身がどれほど変貌を遂げたのかを確認したい。そんな機会が近いうちにきっとやってくるだろう。2018/4/3(火)18:04

### 631. ニッサン・インゲル先生との共同絵画作品『平穏な悟り世界における死と再生』

今回の一時帰国で楽しみにしていたのは、この夏の渡欧前に注文をしていた絵画作品を受け取ることであった。渡欧の直前、コラージュ画の大家であるニッサン・インゲル先生に自分が描いて欲しい絵画のイメージを伝え、作品を創作していただくという好機に恵まれた。

インゲル先生についての話や先生との出会いについては、以前の記事で言及したように思う。今回は、インゲル先生に自分の想いやイメージを伝え、それを絵画作品として具現化していただく機会を得ることになった。

私が付けた作品のタイトルは、邦題『平穏な悟り世界における死と再生』である。作品の中心部に地球を模した大きな円を描いていただき、その円の中に陰陽のシンボルをコラージュで表現してもらうようにお願いした。そして、地球の中にある陰陽の「陰」に当たる部分にベートーヴェンの音楽世界と万物の死を表現してもらった。また、「陽」に該当する部分にバッハの音楽世界と万物の再生を表現してもらった。

ベートーヴェンの音楽世界と地上的な世界観を対応させ、バッハの音楽世界と形而上の世界観を対応させてもらうように依頼をした。そのような依頼をした背景には、ベートーヴェンの音楽もバッハの音楽も、書斎の中で毎日奏でられている音楽であるため、それらの音楽を聴覚のみならず、視覚を通じて触れてみたい、という想いがあったのかもしれない。

また、「死と再生」を作品の根幹テーマにした理由は、当時の私が、常に一瞬一瞬の時間単位の中で生まれ変わることを実感していたからかもしれない。そして、地球を取り巻く外側には、地球を包むようにしてモーツアルトの音楽世界と外面宇宙を表現してもらった。

実家に届けられた絵画の梱包を解き、作品を眺めた瞬間以降、その絵が表現する内容が徐々に自分の内側に流れ込んでくるを感じている。この流れは、突発的なものではなく、徐々に浸透するような、穏やかでありながらも重厚な流れであった。美しい青色を基調とした宇宙の中に

---

モーツアルトの清澄な音楽世界が描かれており、その中に陰陽が表現された地球が描かれている。そこには、バッハの音楽世界とベートーヴェンの音楽世界が体現されている。「絵画を聴き、音楽を描く」と評されるインゲル先生の真骨頂をこの絵の中に見いだすことができる。

同時に、私もこの絵を通じて、そこで表現されているものを視覚以外の感覚器官で捉えていきたいと思うのだ。この絵を書斎に飾り、毎日の仕事と同様に、この作品から汲み取ることのできる意味をより深いものにしていきたい。この絵からどのような意味を見出すことができるのかが、今後の自分の内側の成熟の試金石になるだろう。

最後に、この絵を製作してもらう時に、この作品を私個人のためのものではなく、普遍的なものにしていただきたい、というお願いをしていた。私がこの世界からいなくなった後、この作品を世界のどこかの美術館に飾っていただきたいという思いがあった。多くの人に見ていただき、後世の人たちに少しでも何かを感じてもらえる作品にしていただきたかったのだ。芸術のみならず、ほぼ全ての仕事において、何かを形として残しておくことの大きな価値と意義を今の私は実感している。

この作品は紛れもなく、二人の人間の内面世界が交差することによって織り成された一つの形である。形を伴ったものは、後世に伝えていくことができるのだ。先日京橋を訪れた時、改築中のブリジストン美術館の外観を眺めに行ってきました。インゲル先生の作品が所蔵されているこの美術館にいつか、『平穏な悟り世界における死と再生』というこの作品を寄贈する日まで、歩みを止めることなく進んでいきたいと強く思う。2017/1/4

### 【追記】

この日記を執筆していた当時、私はインゲル先生がほんの数ヶ月前に永眠されていたことを知らなかった。先生が召天されたことを知ったのはつい最近のことであった。この協働絵画作品は、もしかしたら先生の最後の作品の一つだったのかもしれない。この作品を日本からオランダに持ち帰って以降、私は毎日この作品を眺めている。昨日もそうであり、今日もそうだった。これからもこの作品を毎日見続けていくだろう。

この絵画を創造してくださった先生のように、私も絶え間ない創造行為に従事していく。先生はこの世界からいなくなった。だが、先生が産み出した作品は今このようにして存在し続けている。そして、

---

この作品に込められた精神と魂は今もなお生き続けている。これだ。これが一人の人間が成し得る縁起への関与なのだ。この作品のタイトル『平穏な悟り世界における死と再生』に込めた想いを感じながら、先生のご冥福をお祈りする。2018/4/3(火)18:18

### 632. 瀬戸内海の海岸線より

実家に滞在することのできる期間は短かったが、それでも二回ほど実家の目の前に広がる瀬戸内海の海岸を走ることができた。穏やかな瀬戸内海を眺めながら海岸を走るとき、私の意識は観想的な状態になる。そして、そこから一挙に意識が拡張するのを感じるので。目の前に広がる瀬戸内海と同じ広さの意識へ、そして、上空に広がる果てしない空と同じ広さの意識へといざなわれていく。

打ち寄せる波の音に耳を傾けてみると、その音の強弱や音階は常に異なったものだと気づく。また、打ち寄せる波の波形も常に異なったものである。一つとして同じ音や形のない波を見て、驚かない人はいないだろう。ここに万物の生成流転を見ないだろうか。瞬刻瞬刻が常に以前と異なるものとして再創造されている姿を捉えるとき、私自身も同様に、耐えず再創造を繰り返すことを宿命づけられた存在なのだと改めて知る。

目の前に広がる海岸線の端から端まで駆け抜けていく。その足取りは、一步一歩が実感の伴った確かなものである。早く走る必要など一切ない。走り続ける過程の中で、海岸線に足跡を残し、足跡の一つ一つに対して意味を付与していくことが何よりも大切だ。

海岸線の端に到達し、折り返しをした。そこで来た道を振り返ると、自分が長い距離を走ってきたことをその時に初めて知る。来た道と同じ海岸線を走っていても、二度と同じ場所を踏むことができないことに対して、私は神妙な気持ちになった。あの一步はもはや二度とやってこないので。

瀬戸内海の波と呼応するように、私の心も耐えず穏やかであった。そこでふと、小さな男の子とその母親の姿が目に飛び込んできた。二人は波打ち際に立ち、波と戯れていた。その姿を見たとき、一つとして同じ音や形のない千変万化する波と戯れることの大切さを知った。ここで述べている波とは、今日の前に映っている波だけを表すのではない。この世に存在する全ての存在のことを指すのだ。そして、戯れるということの意味は、千変万化する存在との交流であり関与である。また、その親子を見ながら、人間の一生についても想いを馳せばにはいられなかった。

---

私の内側から、「それはそれとしてそのままがいい」という言葉が姿を現した。全ての存在が絶えず千変万化を繰り広げていることを考えると、変化を無理に加速させることや自然な変化を抑圧することは避けなければならないことだと思ったのだ。全ての存在の千変万化を創出する伽藍を保護することが重要だ。そのようなことを胸に思いながら私は海岸線をただただ走り続けていた。2017/1/5

### 633. 名付けと器の拡張

いよいよ日本に滞在できる日は今日で最後となった。昨日、ある会社を訪問させていただき、そこで大変興味深い話をいくつか聞かせていただいた。その中でも一つ、印象に残っている話がある。それは、名付けることの重要性である。どのような経緯でこの話題となったのか定かではない。しかし、この話題には内面の成熟に関する非常に大切な何かが潜んでいることは確かである。

この話題の輪郭を簡単に紹介すると、対象物に名前が付いた瞬間に、それに魂が吹き込まれるということである。例えば、製造設備に「～君」「～ちゃん」と名前を付けることによって、その製造設備はもはや単なる機械ではなくなり、命を与えられたかのような存在になる。名前のない製造設備と名前の付いた製造設備の両者を比較してみたとき、私たちはどちらを大切に扱うだろうか？回答は言わずもがなであろう。

名前のない人間と出会ったことはあるだろうか？私たちは名前を付与されることによって、固有の魂が吹き込まれるのではないか、と思うのだ。確かに、名前がなくとも人間には魂が備わっていると言えるだろう。しかし、その魂を真に動かすものが名前なのではないだろうか。名前とは、事物固有の魂を真に躍動させる媒介物なのではないかと思うのだ。

人に名前が付されることによって愛情が注がれ、物体に名前が付されることによって愛着が湧くといういうのは紛れもない事実であろう。だが、話はそこで終わらない。「名付ける」という行為は、それ以上の意味を内包しているように思えてならないのだ。人間の内面の成熟に対して、この名付けるという行為は極めて大きな役割を果たすと考えている。

これは渡欧する直前の日記の中で言及したかもしれない。私たちの内面世界には、未だ名前の与えられぬ存在者で溢れているのである。ここで述べている存在者とは、体験や経験、感情や感覚といったものである。

---

意識の器の拡張とは、内面世界の存在者をどれほど抱擁できるかの度合いであると言い換えてもいいだろう。そして、内面世界の存在者を抱擁するというのは、まさに名付けるという行為に他ならないのではないかと思っている。そこから何が言えるかというと、未だ名前の与えられぬ存在者に名前を授けるという行為をしない者には、器の拡張など起りようがないということである。確かに、私たちは日常の中で、言葉では表現できない体験や感情と頻繁に出くわす。

興味深いのは、私たちの体験や経験、感情や感覚といふものは、言葉に先行し、言葉よりも大きな土壌を持っているような気がしてならないということである。しかしながら、内面の成熟を進行させる要諦は、徹頭徹尾、言葉に先行したものに対して言葉を付与するという名付けを行うことだと思うのだ。

私たちの体験や経験、感情や感覚といったものに対しても、固有の魂が与えられているのではないかと思うことがよくある。それらの魂に命を吹き込み、真に躍動する存在者に変容させるために、名付けるという行為が必要なのだ。

要点をまとめると、私たちの内面世界は未だ名前の与えられぬ無数の存在者で満ち溢れしており、未だ名前のなかつたものに対して名前が与えられることによって、それらの存在は自己に抱擁される形で躍動を開始する。その躍動が、私たちの器を内側から外側へと拡張させるのだ。2017/1/5

### 【追記】

今この瞬間の私は、この日記を書いた時の私を超えていないと思わされた。それほどまでに、ここで書き留めた事柄に自分でも打たれるものがあった。自分が自分を打つということ。これは一見すると奇妙なようだが、それこそが一人の人間の発達過程に起こる原型的な現象なのだと思う。私たちは自らに打たれながら発達を遂げていく。そんなことを思う。

この日記で書き留められているように、「名付ける」という行為の尊さと意義については本当に深く考え直す必要がある。名付けるという行為は、あらゆる存在者に命を吹き込み、その生命を躍動させることなのだから。2018/4/3(火)18:29

---

## 634. シンクロナイゼーションという現象について

以前から仮説として設定していた考えが、自分の経験を通じてほぼほぼ実証されつつある。それは、「シンクロナイゼーション」と呼ばれる現象である。この現象に強く関心を持ち始めたのは最近のことであり、仮説を立てたのは私がサンフランシスコで生活をしていた頃なので、今から四、五年前のことになる。

「シンクロナイゼーション」という現象に強く関心を持ったきっかけは、フローニングン大学で受講していた「複雑性と人間発達」というコースである。あるクラスの中で、私たちの日常世界には、シンクロナイゼーションという現象が多数存在していることを知った。

シンクロナイゼーションとは、名前の通り、ある現象と他の現象が同じような動きをすることである。より厳密には、二つの現象を何らかの基準で定量化し、時系列に沿った挙動を観察してみると、二つの現象が示す挙動の波が連動することをシンクロナイゼーションと呼ぶ。例えば、チームスポーツなどでチームメイトとの呼吸が合い、連動した動きができるというのは一例だろう。また、お互いの意味交換の呼吸が合致し、調和のとれた対話が成り立つというのも一例だろう。シンクロナイゼーションは当然ながら、人間以外の動物にも頻繁に見受けられる現象だということがわかっている。

米国在住時代にこの現象に関心を持ったきっかけは、私の意識が他者の意識と密接に結びついているという確かな体験をしたことにある。印象に残っている一つの体験は、物理学者のデイヴィッド・ボームが考案した「ボームダイアローグ」という対話実践のグループに一年間参加していた時ものである。

このダイアローグは以前どこかで紹介したように思う。グループの参加者全員が円形になり、特定のアジェンダを設けることなく、静寂の中から一人の者が自身の深層から湧き上がる一言を発する。その言葉を受けて、他の者が自身の深層から湧き上がる言葉を発していくという連鎖を通じてこのダイアローグが成立する。時には数十分から一時間程度沈黙が続くこともおかしなことではない。

しかし、そうした沈黙の最中にあっても確かな感覚は、グループの参加者と私の意識が繋がっているという実感であった。言葉を付け足すと、私たち各人が持つ個人の意識を超えたところに集合意

---

識というものは確かに存在しており、その集合意識にアクセスした瞬間に、他者の意識とシンクロした現象が起こりうるという感覚である。

この数年間実験していた卑近な例は、他者がアルコールを摂取している場に自分を置き、自分はアルコールを摂取しない場合に、私の意識の状態がどのように変化するか、というものである。この数年間において何度かこの実験を繰り返したところ、驚くことに、鮮明な意識状態を維持しながら、アルコールを摂取した時と同様の、クリーム色をした綿菓子に包まれているような意識状態に参入できることができたのだ。

何度かこの意識状態に参入するうちに、この現象は、アルコールを摂取した他者の意識やその場の集合意識と私の意識が連動しているために引き起こされたのではないか、と思うようになった。人間には、他者の意識や集合意識と繋がるような感覚器官が備わっているのか、あるいは人間の意識にはもともと、他者の意識や集合意識と繋がれるような特質を持っているのかもしれない。こうしたシンクロナイゼーションを引き起こす人間の意識は実際に興味深い。

肯定的なシンクロナイゼーションとして、集団での創造性の発揮や集団が連動することによるグループ力などが例として挙げられるだろう。一方、否定的なシンクロナイゼーションとして、集団暴動や集団狂気などが伝染拡大することが例として挙げられる。来年か再来年辺りに、シンクロナイゼーションのメカニズムとプロセスを研究対象として取り上げたいと思う。2017/1/6

### 635. 幽遠世界の富士山

昨日、名古屋である会社を訪問させていただき、今朝は名古屋から東京へ向けて新幹線に乗り込んだ。新幹線に揺られながらしばらく仕事をしていると、左手の窓から雄大な富士山が見えた。雲ひとつない冬の青空の下に白化粧をまとった富士山がたたずんでいる。そのたたずまいを眺めた時、富士山が現実世界に存在しているのみならず、幽遠の境地にもその存在を届かせていることが分かった。

自覚的な自己が融解し、富士山が放つ重厚さの伴ったエネルギーと同一化していく感覚に襲われた。先日、島根県の足立美術館で食い入るように眺めていた横山大観の作品群を思い出す。大観は富士山をテーマにすることが多く、大観の内面の成熟に伴って富士山の表情が少しずつ変化し

---

ているような気がしていた。特に、晩年に描いた富士山は、物理世界に存在する富士山を描いたのではなく、心の眼や魂の眼でしか捉えることのできない幽遠世界に存在する富士山を描いていたのではないかとすら思える。

富士山は、私たち日本人にとって、非常に大きな意味を持つシンボルである。過去無数の人たちが富士山に登り、富士山を拝んできたという積み重なる歴史が、シンボルの意味をさらに深く重厚なものにしていくように思えてならない。私が富士山を窓越しから拝んだ行為も、歴史の一部となり、シンボルの深みと重みを増すことに関与したのだと思う。

幽遠世界にたたずむ富士山を知覚した時、間違いなく私も幽遠世界にいざなわれていたと言えるだろう。そして、幽遠世界の深層からこみ上げてくるじんわりとしたものが目頭を熱くした。時の流れない世界の中で、私はただただ富士山を見つめ、富士山としてその場に存在していた。時の流れを超えた幽遠世界の中では、自己と他の全ての存在は紛れもなく合致する。

本来、他の存在と自己が分離を超えて、統合に向かう時、幽遠世界の存在との眞のつながりがもたらされる。私たちは、この物理世界を超えた世界に存在するものと眞に繋がる時、理由のない涙が込み上げてきてしまうのではないだろうか。この涙は、幽遠世界の存在との接触の証だとしか私は思えないのだ。2017/1/6

### 636. ノルウェーの森

あれは昨年の夏のことだった。私は渡欧の前日、成田空港近くのホテル日航成田に宿泊していた。ロビーのあるフロアには、一つのカフェがある。そこで軽い夕食を注文し、食べ物を待っている時、一つの雑誌に目が止まった。それは旅行詩であり、ノルウェーを特集したものだった。

ページをめくっていると、夏のノルウェーに生い茂る生命力あふれる木々にぐいぐいと引き込まれていった。なんとも言えない魅せられるものがそこにあったのだ。夏のフィヨルドの壮麗さに想いを馳せながら、渓谷を走る列車の窓から見えるノルウェーの森になんとも言えぬ憧憬の念を持った。同時に、「自分はノルウェーに行く必要がある」という直感めいた言葉が舞い降りてきたのだった。

---

その言葉に後押しされる形で、私はこの雑誌を真剣に眺めていた。北欧の夏はさぞかし清々しいのだろうという思いや、冬の北欧も静穏な情緒で満たされているに違いないという思いが湧き上がっていた。特に、オーロラという神秘さを醸し出す自然美に対して、愛着にも似た感情を覚えていた。ノルウェーにはきっと何かがあるに違いない。今でもそのようなことを思う。

そうした思いをさらに強めたのは、今年の日本滞在の最終日に受けたエネルギーワークのセッションから得られた洞察であった。ロサルゼルスから東京に生活拠点を移した昨年の一年間、私の変容を支えてくれたセラピストを訪れ、オランダに戻る前にどうしてもその方のセッションを受けたくなった。そして幸運にも、昨日にその方のセッションを受けることができた。昨日のセッションから得られた洞察の一つが、欧洲の土着の神々、その中でも森を司る神に自分は受け入れられている、というものであった。

この気づきを得たとき、どうして私がオランダにうまく順応できたのかがわかったような気がした。六年前、米国に渡ったときとはまるっきり異なる次元で、オランダに適応している自分が不思議でならなかった。これまでの日記で紹介してきたように、オランダという国で流れる時間感覚と私の内側を流れる時間感覚は調和を成しており、オランダに到着後すぐに、私という存在が自然体に還ることができている実感があったのだ。

結果として、私はオランダという国に受け入れられているという感覚が、欧洲生活の早い段階から芽生えたのだと思う。まさに今回のセッションで得られた洞察も、それを示唆するものであった。欧洲の森を司る神に受け入れられ、見守られているという確かな実感が今の私にはある。その感覚の端緒は、昨年の夏の欧洲小旅行で、ドイツを横断する列車の中で見た青々とした森にあったのかもしれない。ドイツの深い森を見たとき、神妙を感じたのは、私が神の妙に触れていたからかも知れない、と後々になって思う。

セラピストの元を離れ、成田空港に向かう道中、神妙さに包まれている感覚が消えることはなかった。大きな存在に耐えず包まれ、そうした存在と耐えず繋がっているという感覚は、今後の私の足取りをさらに確かなものにするであろう。

---

今回の出国前夜もホテル日航成田に宿泊することにした。夕方、ホテルに到着し、今回もあのカフェに立ち寄った。昨年と全く同じメニューを注文し、書籍や雑誌が立てかけられている本棚に目をやると、ノルウェーを特集したあの旅行誌がそこにまだあったのだ。私はおもむろにその雑誌を手に取り、再びノルウェーの自然に思いを巡らせていた。

過去から今日までのつながりを見て取った時、ドイツの森を司る神が、ノルウェーの森を司る神を私に紹介してくれたのだと思った。この夏、私はノルウェーに行くことに決めた。2017/1/7

### 【追記】

私は本当にこの夏ノルウェーを訪れた。そこで体験もこの一連の日記として書き留めている。ノルウェーによってもたらされた恩恵は計り知れなかった。この日記を読みながら、やはり私の人生は、もはや自分の理解の及ばない世界の働きによって進行しているのだと思う。そしてその歩みは、深耕を伴っている。オスロからベルゲンまでの列車の旅の最中に見た光景がありありと蘇ってくる。あの夏の雄大な大自然を私は忘れる事はないだろう。

昨年の年末に日本に一時帰国した際にも、帰りはホテル日航成田に宿泊した。ノルウェーを特集したあの雑誌はまたしても同じ場所に置かれていた。今年の年初に私は、モロッコと地中海を特集した別の雑誌を眺めていた。もしかすると、いつかそれらの場所に訪れる事になるかもしれない。もう自己を超えた存在に召されるままに日々を生きていこうと思う。2018/4/3(火)19:33

### 637. 休息からの飛躍

私は今、オランダへ向かう飛行機を待ちながら、成田空港のラウンジにいる。渡欧を果たした昨年のあの夏もこのラウンジを利用していた。そして、あの時と全く同じ場所にあるソファに腰掛けて、出発直前のあの時に飲んでいたのと全く同じエスプレッソを丸テーブルの上に置いている。物理的な状況の外見はあの時と全く同じであるにもかかわらず、今この瞬間の自分の心境は随分と異なったものであることに気づく。

静かな大海の中に小躍る波を感じていたあの時とは違う感覚が、この瞬間の私の中を満たしている。それは、深海よりも静かな宇宙空間の中に漂っている感覚と表現できるかもしれない。静けさを超

---

越したこの静けさの中で生きているのが今の自分の姿である。日本に一時帰国する数日前から本日にかけて、私の内側の世界は深い休息の中で何かを温め続けていたのを知る。

具体的には、私の脳と意識が次の境地に至るために大いなる休息期間を設け、両者の活動がゆったりとしたものになっていたのである。はたから見ると、それは脳の活動力の低下や思考力の低下と思われる類のものかもしれない。しかしながら、私が感じていた素直な感覚は、脳と意識の機能低下ではなく、大いなる飛躍に備えた休息状態と呼べるようなものであった。オランダに戻る飛行機を待つ間中、この二週間強にわたって自分の脳と意識を取り巻いていた不思議な休息感について考えていた。

昨日のエネルギーワークのセッションのおかげもあり、休息状態が終焉に向かい一つあるのをこの瞬間に感じている。この休息状態が終わった後、私の脳と意識に対して具体的にどのような変化が起こるのかは定かではない。だが、一つ言えることは、これまで以上の活力を持って探究活動や実践活動に励むことができる、という確信である。オランダで生活を始めてから五ヶ月が経ち、この期間は助走期間という位置付けであった。

オランダの地で再び生活を始める時、これまでとは異質の活動エネルギーを持って探究と実践を丸呑みにしたいと思う。そのようなことを考えていると、乗り換え地点であるヘルシンキ行きの案内がラウンジに流れた。搭乗時間が迫るにつれ、ヨーロッパの大地に戻り、あの時間感覚と存在感覚の中で探究活動ができるに対する喜びと感謝が増していく。再び私は欧州の中で、欧州を通じて毎日を深く生きたいと思った。2017/1/7

## 【追記】

不思議なことに、今年の年初も同じラウンジの同じソファに腰掛け、同じエスプレッソを飲んだ。そのエスプレッソを置いたテーブルも全く同じである。三回連續で同じ場所で同じ行動を取っていた自分がいる。私は本当に繰り返しが好きなのだ。繰り返しが好きな理由は、それが同じであるように見て、実は全く異なる世界がそこに内包されているからである。全く同じ対象物や全く同じ空間を起点にして、これまでの変化の足取りを確認するかのような習性が自分にはあるのかもしれない。毎日毎日同じことをしながらそこに差異を見出して生きることが何ものにも代えがたい充実感をもたら

し、幸福感をもたらす。日々の充実感と幸福感は反復と差異の中に宿っているのだろう。2018/4/3  
(火) 19:40

### 638. ロシア上空での出会い

ヘルシンキ行きの便に関する搭乗案内がラウンジ内に鳴り渡る。この搭乗案内は、搭乗開始を告げるものではなく、最終案内であることを知り、少しばかり急ぎ足で搭乗ゲートに向かった。五時間を超えるフライトでは、スペースにゆとりのある搭乗クラスにしか乗らないようになってからしばらく経つ。今回もヘルシンキ行きのJALのビジネスクラスにお世話になることにした。

本来、こうした搭乗クラスは優先的に機内に案内される特権があるのだが、最終搭乗案内を聞いてから機内に乗り込んだ私にとって、こうした特権はあまり意味をなさなかった。機内に搭乗すると、ビジネスクラスにすでに乗り込んだ人たちがウェルカムドリンクを飲んでおり、確かに自分が随分と遅れて搭乗したのだと知る。

いよいよ成田からヘルシンキへ向けた帰りの飛行機が空に舞った。行きのフライトの中で、オーロラを機内から観察するには今日が絶好の日だということを聞いていた。そのため、帰りの機内の窓からオーロラが見えることを非常に楽しみにしていたのである。欧洲路線に乗るときは、いつもCAの方にオーロラについて話を聞くのだが、いつも新しい発見事項が少なからずある。これまで欧洲路線を活用するときはいつも、オーロラを見るなどを心の奥底で期待している自分がいた。

それにもかかわらず、オーロラを見るための座席指定に関しては考えが及んでいない自分がいたのである。CAの方から話を聞くと、欧洲から日本に向けての便では左側の座席を指定し、日本から欧洲に向けての便では右側の座席を指定すると良いと聞いた。なぜなら、どちらも北極圏側に面した座席だからである。今後、日本に戻るときには、できるかぎり北極圏側に面した座席を指定したいと思う。

オーロラへの期待を持ちながら、機内ではとても快適な時間を過ごすことができた。ダイナミックシステムアプローチに関する二冊の専門書を随分と読み込むことができたし、自分の仕事を進めることもできた。結局、行きの便と同様に、一睡もすることなく、自分の研究と仕事をこなすことに集中していた。

---

フライト時間がちょうど半分を過ぎた頃だっただろうか。「残念ながらオーロラは見えませんが、その代りに綺麗な太陽が見えます」と一人のCAの方から声をかけていただいた。思わず仕事の手を止め、その方の後についていき、非常口の窓から鮮やかな太陽を拝んだ。私はその方と一緒に、地平線の上から顔を出す黄金色に輝く太陽をしばらく眺めていた。自然が生み出すこのような美にずっと浸っていたいという思いで、じっとその太陽を見つめていた。

するとまた、もう一人別のCAの方が加わり、ロシア上空に凜として輝く夕暮れ前の太陽を三人で拝んでいた。新しく加わった方が「『君の名は。』をご覧になられましたか？その映画で出てきた太陽みたいですね」と述べた。

東京滞在の一日目にその映画を見ていたはずなのだが、映画の中の太陽の輝きを忘れていたため、その方の言葉のおかげで、再び作品内の太陽の輝きを想起することができた。私は、ロシア上空で出会ったこの新年の太陽を忘れる事はないだろう。この太陽が顕現する輝きと美は、私の中から金輪際消えることはないと確信する。その輝きと美に常に寄り添いながら生きることができれば、どんなに幸せなことだろうか。2017/1/7

### 【追記】

この日記で書かれていたトリビアを完全に忘れている自分がいた。欧州から日本に行く時には左側の座席を確保し、日本から欧州に帰る際には右側の座席を確保すること。なぜならそれらの座席は北極側に面しており、オーロラを見やすいからだ、ということを完全に忘れていた。今この日記を読みながら、座席の位置とその理屈が心象イメージとして鮮やかに想起されたので、もう席の確保を間違えることはないだろう。飛行機の中でオーロラを見るよりも、もしかすると船旅の船上でオーロラを見ることの方が早く訪れるかもしれない。2018/4/3(火)19:48

### 639. フローニゲンからの再出発

昨夜、日本からフローニンゲンに帰ってきた。フローニンゲン駅に到着した時、もはや安堵感を超えた帰郷感が私を襲った。到着したのは夜の十時前であった。駅から一步外に出た時、視界に広がっていたのは白銀世界であった。私がフローニンゲンの街を離れたのは、今から二週間前のクリスマスイブの日であり、その時にはまだ雪は積もっていなかった。

---

この二週間前の間に、私がいないところでフローニンゲンの季節は確かに進行していたことを知る。相変わらず寒く厳しい冬がフローニンゲンの街を覆っているが、今の私にとって、日照時間の少ない鬱蒼としたフローニンゲンの冬に愛情を持たずにはいられない。

こうした暗く厳しい冬の中で毎日を形作っていくとき、私は精神の静かな境地に降り立つていて、人間本来が持つ動物的な感覚が研ぎ澄まされるのを確かに感じる。そうなのだ。この街を取り囲む冬は、間違いなく私の精神や感覚を鍛え上げているのだ。私の精神や感覚の育て親であるがゆえに、私はこの厳しい冬に対して愛情を持っているのだと思う。

昨夜は自宅に到着後、すぐに就寝をしたため、今朝も早朝の六時頃には目が覚めていた。しかし、結局起き上がるのをせずにそのまま八時近くまで半覚醒状態を維持しながらベッドの上で過ごしていた。ベッドから起き上がり、午前中は荷ほどきをゆっくり行っていた。荷ほどきは私にとって、旅に一区切り入れるための儀式のような役割を果たしていることに気づいた。

スーツケースから荷物を一つずつ取り出し、自宅の元の場所に戻す作業の中で、なんとも言えない気分になった。それは旅を懐かしみ、旅を慈しむ気持ちと形容しても問題はあるまい。この気持ちを抱きながら、年末年始に四年振りに日本に帰ることができて、本当に良かったと思っている。自分の人生が自分の理性を超えたところで動いている確かな実感を得ることができ、今回の一時帰国によって、不動の精神を獲得できたように思う。

不退転の覚悟の中で探究活動を進めていた頃の自分はもはやいない。不退転の覚悟を通り抜けた覚悟の中で、日々の活動を継続していくという思いで今は満たされている。この体験の中にも、「覚悟」という言葉とそれが生み出す感覚の多様な階層を見て取ることができる。同時に、自分の中に蓄えられてきた既存の言葉が、表面上の形式的な意味を超えて、新たな意味を展開し、その展開が新たな感覚を生み出すという一連の流れに対しても、もはや驚きの感情は湧いていない。

つまり、「発見」という言葉の意味とそれが生み出す感覚が私の中で変わってきたということを、今日のこの瞬間に確かに掴んだと言える。内側で絶えず進行を続ける諸々の変化に気づくことが発見なのではなく、そうした変化が自分の存在そのものを表すものだという気づきの中で、それらの変化が自己に組み込まれている一部始終を見届けることが発見なのだと思う。

---

---

この二週間の一時帰国は、昨年の夏の欧州小旅行に匹敵するほどの精神的変容を促す旅であった。二週間前の自分はもはやここにはいない。その別れは必然のものであり、ここからの出発もまた必然なものである。2017/1/8

## 640. 欧州生活第二章の開始

日本からフローニンゲンに戻ってきての二日目の朝を迎えた。自分がより大きな総体と一体となっている感覚のもと、全ての活動に従事するための活力が、淀みなく内側を流れているのが手に取るようになる。

一昨日、フローニンゲン駅に到着した時に感じた帰郷感が示すように、オランダ北部のこの小さな街が自分の故郷の一つに変貌したことは嬉しい。同時に、この街に自分が受け入れられたということもまた嬉しさを誇る。

今日も睡眠を十分にとり、時差ぼけもほとんど解消され、今日から本格的に探究と仕事に取り掛かることができそうである。起床後、書斎の窓から外を眺めると、八時近くになろうというのに、辺りは闇に包まれていた。闇の中、街灯に照らされる形でストリートの存在が浮き上がっている。ストリートを見ると、私がフローニンゲンに帰ってきた時に積もっていた雪が全て溶けていることに気づいた。

フローニンゲンの街も私と同じように、内側からほとばしる熱気を醸し出しているのかもしれない、と思った。これはフローニンゲンの街と私がシンクロナイゼーションを起こしていると解釈してもいいかも知れない。そうしたことを思わずにはいられないほど、過酷な冬の最中にあって、熱気を内から外に表出すフローニンゲンの街に共感をしたのである。

街への共感とともに、街から受容されているという感覚の中で、自らの仕事に取り組めることは何よりも有り難い。こうした感覚がいかに自分を支えてくれていることか。確かに、一人の人間を支えるのは、物理的な他者であり、取り巻く環境や文化といった存在だろう。しかしながら、一人の人間を支えるのはそれだけではない。

外界との接触と関与から生み出される内側の感覚そのものが自分を支えることもあるのだ。今の私は、こうした内と外の支えの中に生きていることを強く実感している。こうした実感の中、今日の仕事

---

に取り組みたい。今日は、研究論文のイントロダクションの第一稿を執筆し、カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論をもとにした分析マニュアルを作成したい。

氷点下の世界の雪を溶かすほどの情熱を持って今日の仕事に打ち込むつもりである。情熱を溶かす情熱の中で、これから日々を形づくっていきたいと思う。そして、今日からの欧洲生活の第二章は、序章をはるかに凌駕するものであるに違いない、と内側の存在者がつぶやいている。そのつぶやきの声を辿り、内側の存在者との邂逅を果たすまで、遙か彼方に向かって再び歩き出したいという思いで一杯である。2017/1/9